



ゆめ通信

2026.9.1. No.147

発行 日本養豚事業協同組合

〒104-0033 東京都中央区新川2-1-10
八重洲早川第2ビル6階

TEL.03-6262-8990 FAX.03-6262-8991

第26回通常総会開催

代表理事 松村 昌雄

令和8年7月25日、第26回日本養豚事業協同組合通常総会は大手町サンケイプラザにおいて総出席者179名を迎え、慎重審議の末議案事項すべて可決されました事を報告いたします。連日の猛暑の中、大勢の方にご出席いただき組合設立以後四半世紀が過ぎた今年も盛会となりました。総会の司会は稲吉克仁理事(有)マルミファーム代表取締役)のもとに行われ、議長は会場から小田島新一氏(株)オダシマファーム代表取締役)が選出され議事進行いただきました。総会運営のため両名のご尽力に感謝申し上げます

25期末433名であった組合員数は新規加入者18名と多くのご入会をいただきましたが、10名の退会者(主に廃業が理由)がでたことにより26期末は10名増の443名となりました。全国的な養豚農家の減少傾向は依然続いておりますが、設立以来の加入者は延べ750名を超えていますが、廃業などにより約300名が組合を離れています。その中でも会員数と取引数量が増えていることは、良い商品を安定供給してきた成果だと受け止めております。

組合は設立から26年を迎えました。この間、外部からの支援に頼ることなく、組合員の皆様が力を合わせ、100%自前の組織として歩んでまいりました。特に、中心事業である共同購入販売事業のご利用が、組合の財政基盤の強化につながっております。共同購入販売事業は、総売上げ24億9千7百万円、前期繰り越しを含めて4千8百万円の利益が確保できたことから利用分量配当金は4千万円となります。今期純資産2億8千8百万円、流動資産合計6億9千4百万円となり、今期も資産を充分蓄える事が出来、組合として更なる組合員への還元を目指して運営してまいります。今期も「ゆめシリーズ」「メ

ンデルデュロック精液」「Topigs Norsvin母豚」等の商品を中心に共同購入販売事業拡大に努めて参ります。

私は、これまでの「良い豚、良いえさ、良い管理」に「良い仲間づくり」を加え、この四つを組合活動の原点としてまいりました。良質な商品を少しでも安く、安定してお届けすることを目指した結果、多くの商品で前年度を上回る販売実績を残すことができました。皆様のご協力に感謝申し上げます。

一方、養豚経営を取り巻く環境は厳しさを増しています。豚舎建築に必要な母豚1頭当たりの設備投資額は、もはや300万円でも足りません。将来を見据えた設備投資、国産豚肉の自給率維持、後継者育成など課題は山積しています。組合活動を通じ、皆様の経営に良い影響を与えられる取り組みを続けてまいります。

豚事協は、組合員が自分たちのために運営する組織です。組合員500名の目標は未達成ですが、これだ



挨拶をする松村昌雄代表理事

けの企画を実現し、多くの仲間が集まる力があります。ただし「組合の為の組合」になってはいけない、あくまで主役は組合員であり、組合員自ら運営し組合員の為の組合でなければなりません。売上も増加し、新規組合員も増えているこの時こそ、本来の組合活動の原点に立ち返り今後を見据えた運営に当たる時であると強く決意しております。加入された皆様には、組合の発展にも力を寄せていただきたいと願っております。

新年度事業計画案の説明時にもご報告いたしましたが、指定配合飼料「ゆめシリーズ」の四半期ごとの価格については、これまで組合員全員に公表してまいりましたが、本年度から情報提供の対象を「購入組合員」に限定いたしました。

今回の変更は、公表した価格が独り歩きし、他社飼料の値下げ交渉に利用されるといった弊害を防ぎ、実際に「ゆめシリーズ」をご利用いただいている組合員の利益を最優先するためのものです。当組合は、原料情勢や新たな加工飼料へのニーズに対応しながら、より良い条件を引き出すため粘り強く交渉してまいりました。しかし、その成果が他社との価格交渉にのみ使われ、組合としての取扱数量が伸びなければ、製造を担うフィード・ワンをはじめとする飼料メーカー各社としても柔軟な価格対応を続けることが難しくなります。この状況を踏まえ、苦渋の決断をいたしました。

価格情報の取得を主な目的としてきた組合員の皆様には、ご不便をおかけするかもしれません。しかし、

当組合が26年間にわたり提供してきた価値は、価格情報だけではなくありません。組合員が力を合わせ、その規模と交渉力を実際の利用者へ還元することが、組合活動の原点です。世代交代が進む今こそ、この理念を改めて共有し、「ゆめシリーズ」を支えてくださる組合員の利益を守るため、今回の変更にご理解を賜りますようお願い申し上げます。

理事や各地域の支部長も若返り、意欲を持って組合運営を担ってくれています。世代交代が遅れているのは、理事長である私自身です。私に残された時間も決して長くありません。力を尽くしながら、次の世代へ組合運営をしっかり引き継いでまいります。

議事終了後には、本年6月に実施した米国視察研修の報告（㈱ルスツ羊蹄ファーム市田氏）と、同研修をコーディネートしていただいた株式会社スワイン・エクステンション&コンサルティングの大竹聡獣医師による記念講演「米国における養豚生産者主体の生産システムの最新情報」を行いました。新年度も「良い豚、良いえさ、良い管理、良い仲間づくり」の精神を大切に、役職員一同、組合員の皆様の発展のため尽力してまいります。



アメリカ視察研修発表の様子



記念講演：大竹聡先生

アメリカ研修報告2026年

ルスツ羊蹄ファーム株式会社 市田 裕太郎
(この内容は7月24日通常総会時に発表された内容です)

今回のアメリカ研修では、World Pork Expoの視察と二つの養豚農場の見学を通じて、アメリカ養豚の強さを支える「仕組み」について学びました。渡米前は、アメリカの養豚に対して、徹底したバイオセキュリティ、大規模な設備投資、自動化による少人数運営、データに基づく管理、安価な飼料を背景とした低コスト生産といったイメージを持っていました。実際に現地を見ると、そのイメージと一致する部分がある一方、日本とは前提条件が大きく異なり、単に設備や方法だけをまねても同じ結果にはならないことが分かりました。

展示会で感じた三つの方向性

World Pork Expoの会場で強く感じたのは、「作業の自動化」「作業の標準化」「生産の安定化」という三つの方向性です。どの機械も、単に作業時間を短縮するためだけではなく、作業者によるばらつきを減らし、誰が担当しても同じ水準の仕事ができるようにすることを目指していました。その結果として、人件費を抑えながら、豚と人の負担を減らし、生産を安定させようとしているように感じました。何でも自動化するのではなく、費用に見合う効果が得られる作業へ絞って導入する姿勢が、実用性につながっていると感じました。

印象的だったのが、子豚のワクチン接種時に使用する保定装置です。ベルトコンベアで子豚を送りながら保定する仕組みで、4-20kgの子豚を1時間に約1,500頭、1分間に25頭という速さで接種できるとの説明でした。開発者はミネソタ州で養豚を営む生産者で、実際の現場で感じていた課題からこの装置を開発したそうです。接種作業を安定させるだけでなく、作業者と豚のストレスを減らし、子豚の脚の事故や針折れの防止にもつなげる考え方です。

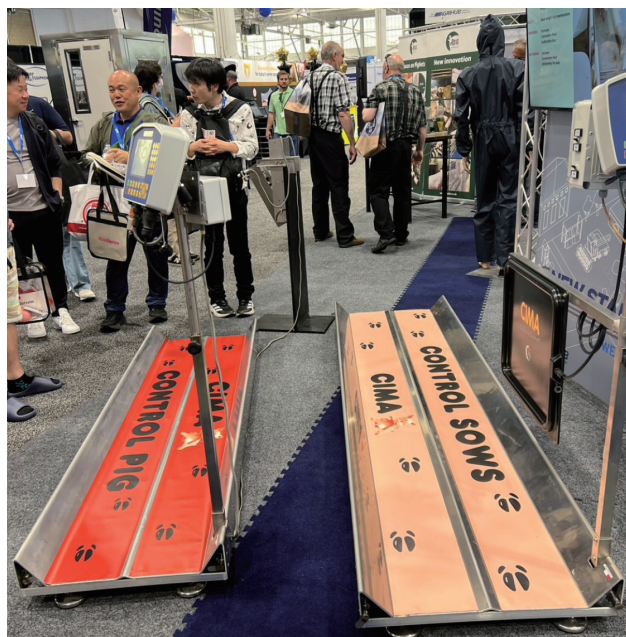
歩行式の自動体重測定器も興味深い設備でした。豚が台の上を通過するだけで体重を測定し、データを保存・転送できます。体重に応じて自動でカラー

スプレーを塗布したり、進行方向の扉を開閉したりする機能も追加できます。候補豚を移動する際に初回交配に適した体重へ到達しているかを確認することや、肥育豚の出荷選別に活用できます。人が一頭ずつ見て判断していた作業を、数値に基づいて効率よく行う仕組みだと感じました。

暑熱対策では、IHT Groupが開発する母豚用のク



図① 子豚保定装置



図② 歩行式自動体重測定器

ーリングすのこが紹介されていました。ストール内に設置し、内部に水を通して母豚の体を下から冷却する設備です。暑熱期でも母豚の飼料摂取量が増え、離乳子豚の体重も増加したとの説明があり、2027年の市場導入が予定されています。このほか、3階建ての豚輸送トラックや、AIカメラで母豚のボディコンディションを判定し、その状態に応じて給餌量を調整する技術も展示されていました。いずれも、熟練者の感覚だけに頼らず、測定とデータによって判断をそろえるという考え方が共通していました。

少人数運営を支える農場の構造

農場視察では、アメリカの生産性を「一人が何頭を管理しているか」という視点から考えました。最初に訪れたRock Creek Swineは、PICの種豚を使用する母豚5,000頭規模の繁殖農場です。スタッフは16名で、見学時の説明では、現場稼働13名にリサーチ担当2名を加えた体制でした。単純計算では、一人あたり約312頭の母豚を管理していることになります。日本では一人あたり150頭前後が一つの目安とされるため、およそ2倍の差があります。次に訪れたProgress Pointは、肉豚5,000頭規模のWean to Finish肥育農場です。21日齢で離乳した子豚を導入し、2,500頭ずつ二つの群で管理していました。通常のスタッフは1.5名で、離乳豚を受け入れてから1か月間と出荷時には2名で対応するとのことでした。一人あたりに換算すると約3,333頭を管理しており、日本の目安である約2,000頭を大きく上回ります。重要なのは、なぜそれだけの少人数で運営できるのかを考えることです。豚舎内では、給餌や給水、換気などの基本設備が大規模な群管理を前提に配置され、日常作業ができるだけ単純になるよう設計されていました。個々の作業者が経験を基に細かく判断するのではなく、農場全体が一定の手順で動くようにつくられています。

また、大規模農場だからといって、すべてが最新鋭で複雑な設備になっているわけではありません。豚舎は多数の豚を同じ手順で管理しやすい、比較的単純な構造でした。設備が複雑になれば、故障への対応や部品交換、日常の点検にも人手と費用が必要です。作業を減らす設備を導入しながら、管理する

設備自体は増やしすぎないという考え方も、低コスト運営の重要な要素だと感じました。

日本との違いは「何に人手がかかるか」

バイオセキュリティについては、入場時のルールは厳格でしたが、農場全体を見ると、日本よりも緩やかに感じる部分もありました。今回訪問した農場では、汚染区域と清潔区域の境界を農場入口に置いており、野生動物の侵入防止設備や車両消毒槽は確認できませんでした。病原体を防ぐ意識が低いということではなく、どこを境界線とし、どこに費用をかけるかという判断が日本とは異なるのだと考えられます。

さらに大きな違いは、糞尿処理の仕組みです。見学した農場には、日本で見られるようなラグーンやコンポストなどの処理施設はなく、豚舎のすのこ下に深さ3-4mの貯留空間を設け、約1年分の糞尿をためる方式が採用されていました。アメリカでは糞尿がトウモロコシなどの飼料作物を育てる肥料として価値を持ちます。畑に施す肥料を確保することが、農場経営に関わる動機になる場合もあるとのことでした。

日本では、糞尿を適正に処理するために、固液分離、発酵、浄化など複数の工程が必要となり、設備の運転や維持管理にも人手がかかります。一方、見学し



図③ スーパーマーケットにて豚ロース

たアメリカの農場では、糞尿を貯留し、肥料として農地へ戻す流れが成立しているため、大がかりな処理プラントや、その管理に携わる人員を置く必要がありません。労働生産性を比較するのであれば単に人間1人当たり母豚何頭、肉豚何頭で比較するのではなく、農場全体の作業量を何人でこなせるかを比較する必要があると感じました。

低価格を前提にコストを下げる

豚肉の価格にも、日本との大きな違いがありました。視察時にスーパーマーケットで確認したロース肉は1ポンド1.89ドルで、1ドル160円として換算すると1kgあたり約670円です。部位や加工度によって価格は異なり、スライスなど手間をかけるほど高くなりますが、全体として日本の販売価格のおおむね2分の1から3分の1という印象でした。この価格環境では、生産者が豚肉そのものの付加価値を高めること以上に、いかに生産コストを下げるかが重要になります。特に大きな割合を占める人件費を抑えるため、作業を減らし、単純化し、誰でも同じように実施できる形へ変えていきます。データを使って異常を早く見つけ、必要なところにだけ人が動き、少ない労力でも生産を安定させる仕組みをつくっています。農場成績を最大にすることだけを目指すのではなく、成績とコストのバランスを見ながら、利益が最も残る点を探しているように感じました。

持ち帰るべきは「機械」より「考え方」

アメリカ養豚は、広い農地で安価な飼料原料を生産し、その飼料を背景に大規模養豚を行い、発生した糞尿を肥料として農地へ戻すという循環の上に成り立っています。その中で豚肉生産をデータ化し、少人数でも安定的に生産できる仕組みをつくり、国内消費と輸出によって大量の豚肉を販売しています。設備の一つひとつではなく、飼料、農地、糞尿、人員、販売までが一つにつながっていることが、アメリカ養豚の強さだと感じました。一方、日本には土地条件、環境規制、流通、消費者の求める品質など、アメリカとは異なる前提があります。そのため、現地の設備や管理方法をそのまま導入すればよいわけではありません。私たちが持ち帰るべきなのは、まず作業

を標準化し、ばらつきを減らし、その上で自動化できる部分を見極めるという順序です。また、農場成績だけでなく、そこに必要な労働時間、設備費、維持管理費まで含めて評価することも欠かせません。

人材不足は、アメリカと日本に共通する課題です。限られた人員で農場を継続するためには、その作業が本当に必要か、誰でもできる形に変えられないか、データや機械に任せられないかを一つずつ見直す必要があります。今回の研修で得た最大の学びは、低コスト生産とは単なる経費削減ではなく、無理なく、ぶれなく、継続して生産できる仕組みをつくることだという点です。日本の条件に合う形で取捨選択し、自農場の働き方と生産体制を見直すことが、今後ますます重要になると感じました。

表1 27期アメリカ海外研修参加者名簿

所在地	組員名	参加者名
愛知県	(有)アクティブピッグ	山本 孝徳
北海道	ルスツ羊蹄ファーム(株)	市田 裕太郎
北海道	(株)ドリームポーク	加藤 慎二
北海道	(株)ほべつすわいん	高橋 朋宏
北海道	(有)道南アグロ	澤田 直人
宮城県	(有)みずの	柏舘 佑亮
栃木県	(有)あさの	太田 竣介
千葉県	(有)ブライトピック千葉	金丸 昂平
千葉県	(株)千葉ピッグ	川野 亨
愛知県	(有)マルミファーム	松井 幸生
大阪府	ファロスファーム(株)	後藤 寛史
熊本県	熊本興畜(株)	岩佐 龍太郎
事務局	日本養豚事業協同組合	加藤 大輝
引率	(株)スワイン・エクステンション &コンサルティング	大竹 聡

Topics

JASVベンチマーキング 2025年データの解析結果

明治大学 農学部 農学科 専任准教授
佐々木 羊介

はじめに

養豚経営において、客観的な生産データに基づき自農場の実態を正確に把握する「ベンチマーキング」の重要性が高まっています。従来の経験や勘に頼る管理手法だけでは、構造的な高コスト体質や目まぐるしく変化する市場環境に柔軟かつ的確に対応することが困難になってきているためです。現在、日本の養豚産業は、高止まりを続ける飼料・資材価格や慢性的な労働力不足、さらにはCSF（豚熱）をはじめとする悪性伝染病の侵入リスクなど、複雑に絡み合う多面的な課題に直面しています。このような不確実性の高い時代において、持続可能で強固な経営基盤を確立するためには、単に現状の管理を維持するだけでなく、農場から日々生み出される膨大なデータを精緻に分析し、生産性のボトルネックを科学的に特定して迅速な改善判断を下す「データ主導型経営」への転換が不可欠です。ベンチマーキングは、まさにその経営の羅針盤となる手法であり、他者（業界平均や上位農場）との相対的な比較を通じて、自農場の真の強みと弱みを明確に浮き彫りにします。

本稿では、ベンチマーキングデータを用いた解析結果として、(一社)日本養豚開業獣医師協会（JASV）が生産者とともに実施しているJASVベンチマーキングの2025年データを用いた解析の結果について紹介します。

解析に用いたデータの概要

本調査では、JASVベンチマーキングのWEBシステムに提出されたデータを使用しました。JASVベンチマーキングでは、表1に記載された項目について、月ごとの数値を提出・入力します。経営形態やPRRS

表1 JASVベンチマーキングの入力項目

区分	項目
農場情報	飼養母頭数、飼養品種、経営形態、養豚場従事者数、PRRSの有無
繁殖情報	種付頭数、分娩腹数、総産子数、生存産子数、離乳子豚頭数、分娩クレート数、自家産の候補繰入頭数
肥育情報	出荷頭数、出荷枝肉重量、総枝肉販売金額、離乳後の肉豚在庫頭数、哺乳豚在庫頭数、離乳後事故頭数、肥育面積、子豚販売情報
費用情報	総飼料購入量、総飼料購入金額（全体）、ワクチン・抗菌剤費、出荷肉豚の運賃、と畜経費

の有無など、月ごとの変動が少ない項目を除くと、毎月入力が必要な項目は約20項目です。提出されたこれらの項目を用いて、繁殖・肥育・経営に関する各種成績を計算しています。

本調査では、2025年にデータを提出した189農場を当初の分析対象としました。ここから、分析の精度を高めるため、入力データの精査を行いました。具体的には、明らかな入力ミスや異常値、データの欠損がみられる農場、および黒豚（バークシャー種）の飼育農場を除外・適宜修正する措置をとりました。その結果、最終的には2025年の一年間（1～12月）におけるすべての月のデータが揃った171農場の年間成績を分析対象として使用しました。なお、この集団は日本全体の養豚農場の中で比較的成績が上位に位置する農場によって構成されている点に留意する必要があります。

全体の記述統計

記述統計とは、収集したデータの示す傾向や性質を把握する手法のことです。表2には2025年ベンチマーキングデータにおける主要な経済指標および繁殖・肥育成績の記述統計を示しました。

経済指標の経時的変化に関して、図1と図2に、2012年から2025年における出荷肉豚1頭当たりおよび年間母豚当たりの販売額・飼料費・粗利益の推移

表2 2025年ベンチマーキングデータの記述統計

項目	粗利益 (/母豚/年)	販売額 (/母豚/年)	飼料費 (/母豚/年)	粗利益 (/肉豚)	販売額 (/肉豚)	飼料費 (/肉豚)	常時 母豚数	出荷頭数 (/母豚/年)
上位 10%	¥861,486	¥1,444,979	¥450,084	¥27,624	¥48,717	¥19,518	1,970頭	29.6頭
上位 25%	¥716,367	¥1,313,440	¥505,149	¥24,840	¥46,850	¥21,008	1,119頭	27.5頭
中央 値	¥575,152	¥1,163,323	¥565,375	¥21,892	¥45,717	¥23,360	583頭	25.0頭
下位 25%	¥427,704	¥989,137	¥625,228	¥18,624	¥43,584	¥25,506	278頭	22.1頭
下位 10%	¥333,764	¥866,603	¥674,956	¥15,566	¥41,014	¥27,808	157頭	19.7頭

項目	増体重 (g/日)	枝肉重量 (/頭)	離乳後 事故率	離乳子豚数 (/母豚/年)	離乳子豚 数(/腹)	分娩回転 率(/年)	生存産子 数(/腹)	総産子 数(/腹)	分娩率	哺乳中 死亡率
上位 10%	736.0g	80.6kg	3.6%	31.4頭	13.2頭	2.45	15.4頭	17.5頭	91.9%	6.6%
上位 25%	695.4g	79.2kg	4.7%	29.7頭	12.4頭	2.39	14.4頭	16.7頭	89.6%	9.2%
中央 値	644.5g	77.5kg	6.8%	27.2頭	11.8頭	2.33	13.4頭	15.5頭	86.0%	12.0%
下位 25%	594.6g	75.6kg	9.9%	25.1頭	10.9頭	2.25	12.4頭	14.1頭	82.3%	15.4%
下位 10%	525.2g	73.2kg	16.6%	22.9頭	10.1頭	2.16	11.5頭	13.2頭	78.8%	18.5%

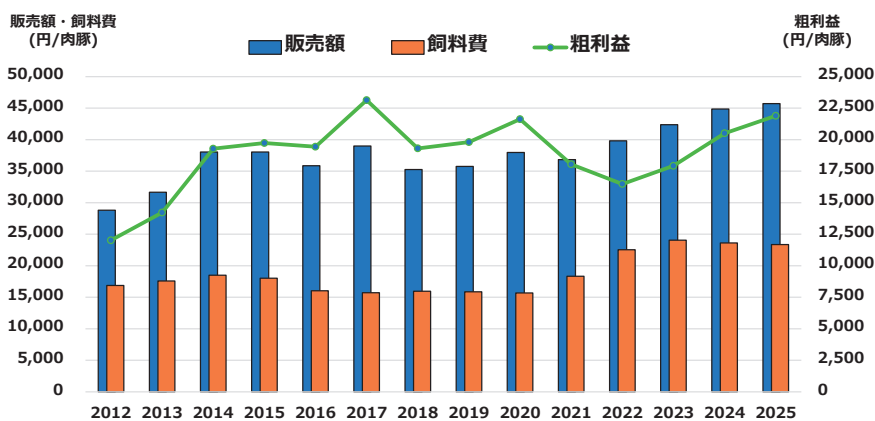


図1 出荷肉豚1頭当たり販売額・飼料費・粗利益の推移（値は各年の中央値）

	販売額	飼料費	粗利益
2012年	¥28,812	¥16,878	¥12,016
2013年	¥31,664	¥17,580	¥14,220
2014年	¥38,034	¥18,504	¥19,282
2015年	¥38,039	¥18,018	¥19,731
2016年	¥35,861	¥16,032	¥19,440
2017年	¥38,998	¥15,722	¥23,129
2018年	¥35,260	¥15,960	¥19,309
2019年	¥35,754	¥15,868	¥19,808
2020年	¥37,973	¥15,682	¥21,625
2021年	¥36,838	¥18,332	¥18,046
2022年	¥39,817	¥22,542	¥16,484
2023年	¥42,380	¥24,057	¥17,922
2024年	¥44,860	¥23,609	¥20,505
2025年	¥45,717	¥23,360	¥21,892

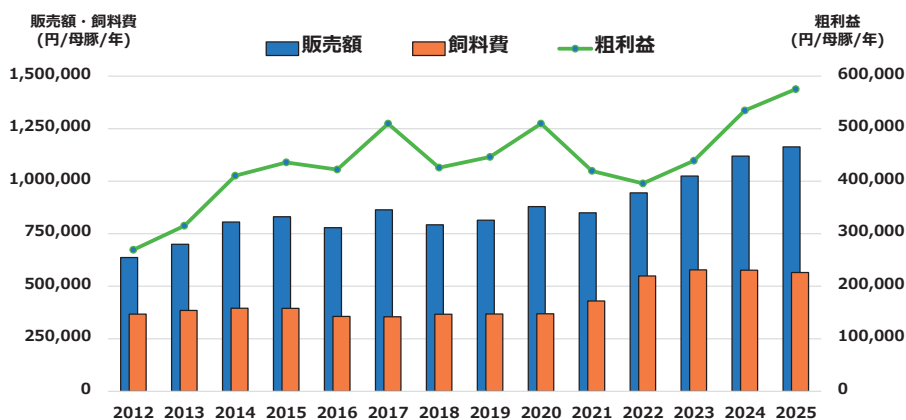


図2 年間母豚当たり販売額・飼料費・粗利益の推移（値は各年の中央値）

	販売額	飼料費	粗利益
2012年	¥636,484	¥367,171	¥269,313
2013年	¥699,823	¥384,729	¥315,094
2014年	¥805,653	¥395,261	¥410,392
2015年	¥830,696	¥394,957	¥435,739
2016年	¥778,670	¥356,519	¥422,151
2017年	¥863,949	¥354,482	¥509,467
2018年	¥792,347	¥366,642	¥425,705
2019年	¥814,179	¥368,014	¥446,165
2020年	¥878,815	¥369,188	¥509,627
2021年	¥849,485	¥429,979	¥419,506
2022年	¥944,477	¥548,824	¥395,653
2023年	¥1,024,511	¥577,714	¥438,959
2024年	¥1,119,057	¥576,115	¥534,551
2025年	¥1,163,323	¥565,375	¥575,152

を示しました。出荷肉豚1頭当たりの指標について、出荷肉豚1頭当たり販売額は年々上昇し、昨年に引き続き、今年も過去最高値を更新しました（中央値で45,717円）。これは後述する枝肉価格の上昇と枝肉重量の高水準の維持が要因と考えられます。出荷肉豚1頭当たり飼料費は、2022年以前と比べると高騰しているものの、昨年（23,609円）からはほぼ横ばい（23,360円）でした。そのため、出荷肉豚1頭当たり粗利益は昨年（20,505円）よりも増加し、21,892円となりました。年間母豚当たりの指標は基本的には出荷肉豚1頭当たりの指標と近似していますが、年間母豚当たりの指標は年間母豚当たり出荷頭数の影響を受けており、出荷肉豚1頭当たりの指標の傾向と完全には一致しません。年間母豚当たり販売額は昨年に引き続き、今年も過去最高値を更新し、約116万円/母豚/年でした。年間母豚当たり飼料費が昨年とほぼ同様であったことより、年間母豚当たり粗利益は前年よりも増加し、過去最高となる約57万5千円/母豚/年となりました。

出荷肉豚1頭当たり販売額および飼料費を構成する要因として、図3には枝肉重量・枝肉価格と飼料

価格・農場枝肉FCRの推移を示しました。枝肉重量は2022年までは76kg前後を推移していましたが、豚枝肉取引規格の重量範囲引き上げにより、2023年以降増加しており、2025年も中央値で77.5kgと同等の数値となっています。また枝肉価格も昨年に引き続き堅調であり、前年よりもさらに上昇しています。これらの要因が、出荷肉豚1頭当たり販売額を押し上げて、結果的に年間母豚当たり販売額の増加にも繋がったと考えられます。一方、飼料価格は昨年と同様に高値傾向が続いているものの、数値はほぼ同値であり、ある程度の頭打ちがみえてきたのかもしれない。また農場枝肉FCRは毎年改善傾向にあり、飼料の利用効率は年々改良されていることが伺えます。

次に、年間母豚当たりの経済指標を構成する要因として、図4には年間母豚当たり出荷頭数・離乳子豚数と分娩回転率・一腹当たり生存産子数の推移を示しました。年間母豚当たり出荷頭数・離乳子豚数ともに年々増加傾向にあり、これは多産系母豚の導入に伴う一腹当たり生存産子数の増加に起因していると考えられます。これらの成績の向上が、年間母

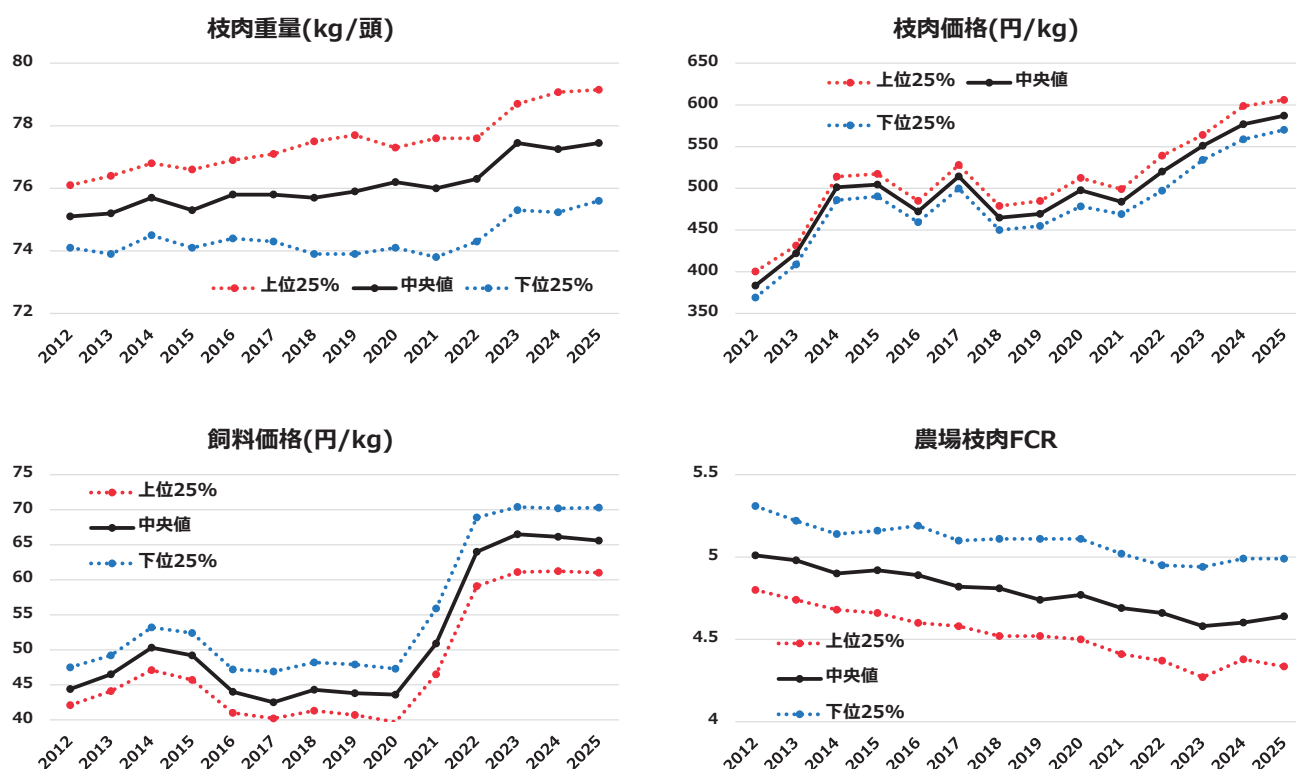


図3 枝肉重量・枝肉価格と飼料価格・農場枝肉FCRの推移 (値は各年の中央値)

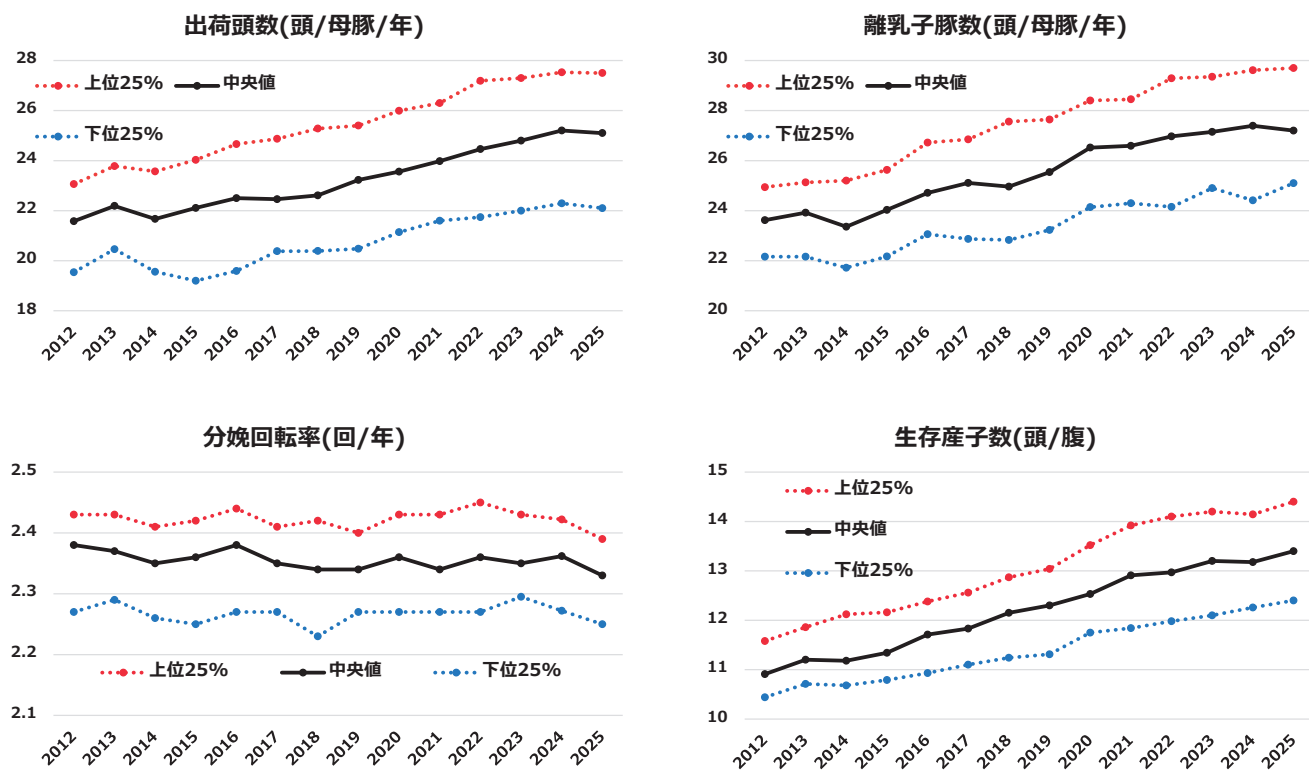


図4 年間母豚当たり出荷頭数・離乳子豚数と分娩回転率・一腹当たり生存産子数の推移（値は各年の中央値）

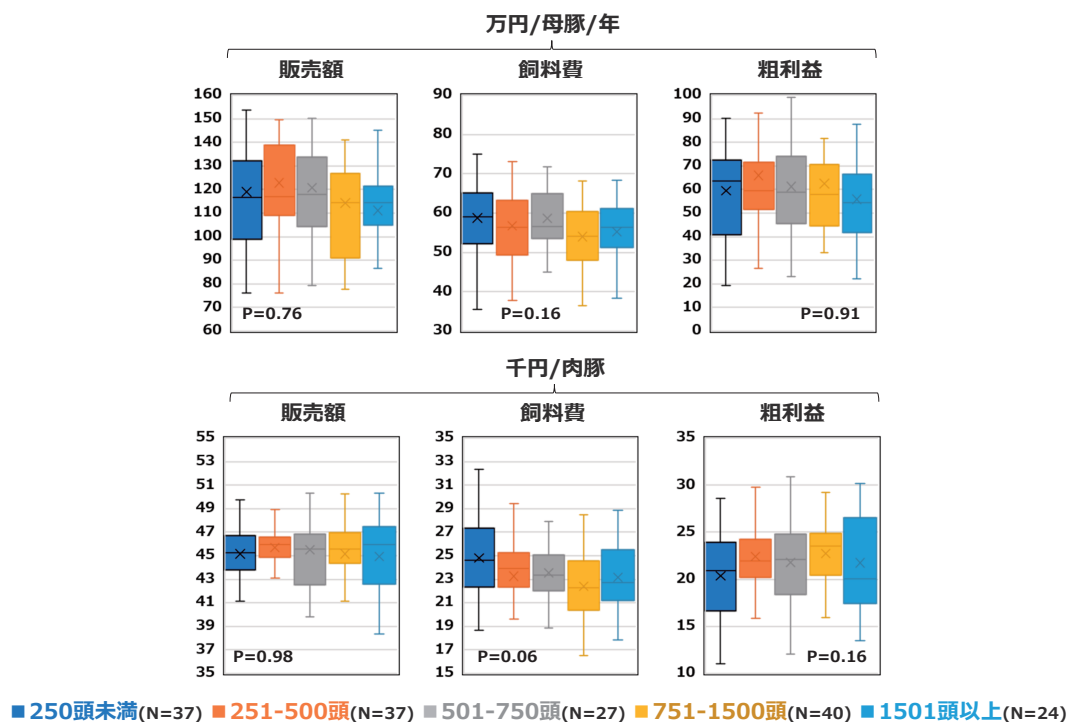


図5 飼養規模（母豚数）別の経済指標の比較

豚当たり販売額および粗利益の過去最高値の更新に繋がっていると考えられます。一方、分娩回転率は年による変動はあまり見られておらず、分娩回転率を構成する因子である分娩率や非生産日数などにはあまり増減がないことが推察されます。

属性別の成績比較

各種成績の属性別比較として、飼養規模別およびPRRSの罹患状況別の比較を紹介いたします。

飼養規模（母豚数）別の比較において、図5には飼養規模別の年間母豚当たりおよび出荷肉豚1頭当たりの経済指標の比較を示しました。両指標において、飼養規模グループ間における販売額、飼料費、

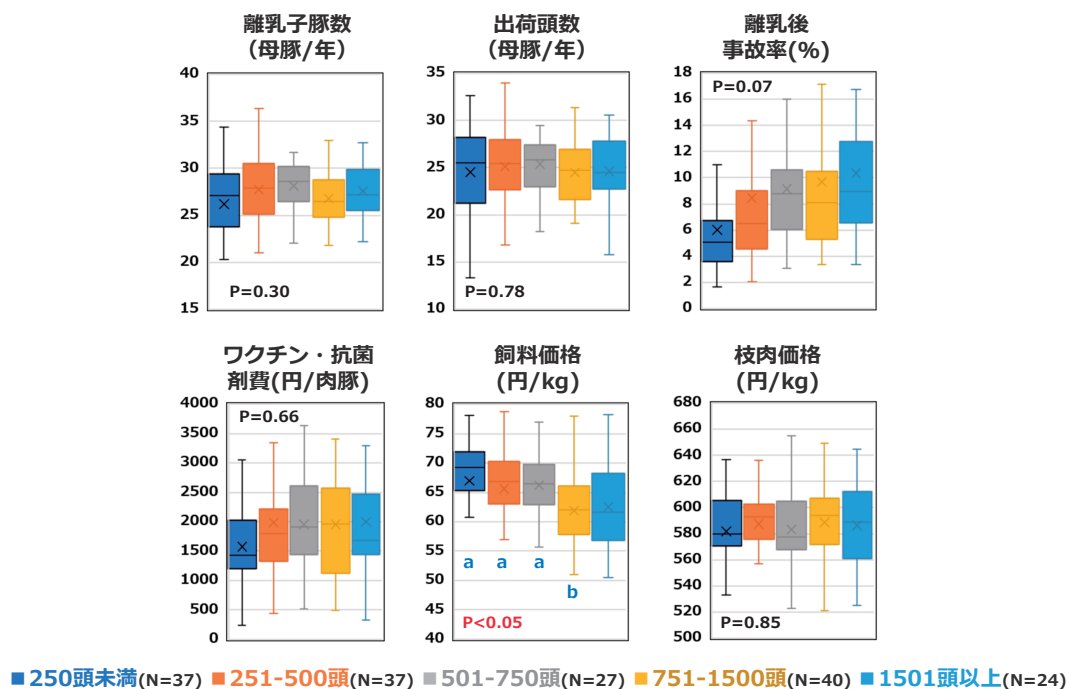


図6 飼養規模（母豚数）別の繁殖/肥育成績の比較

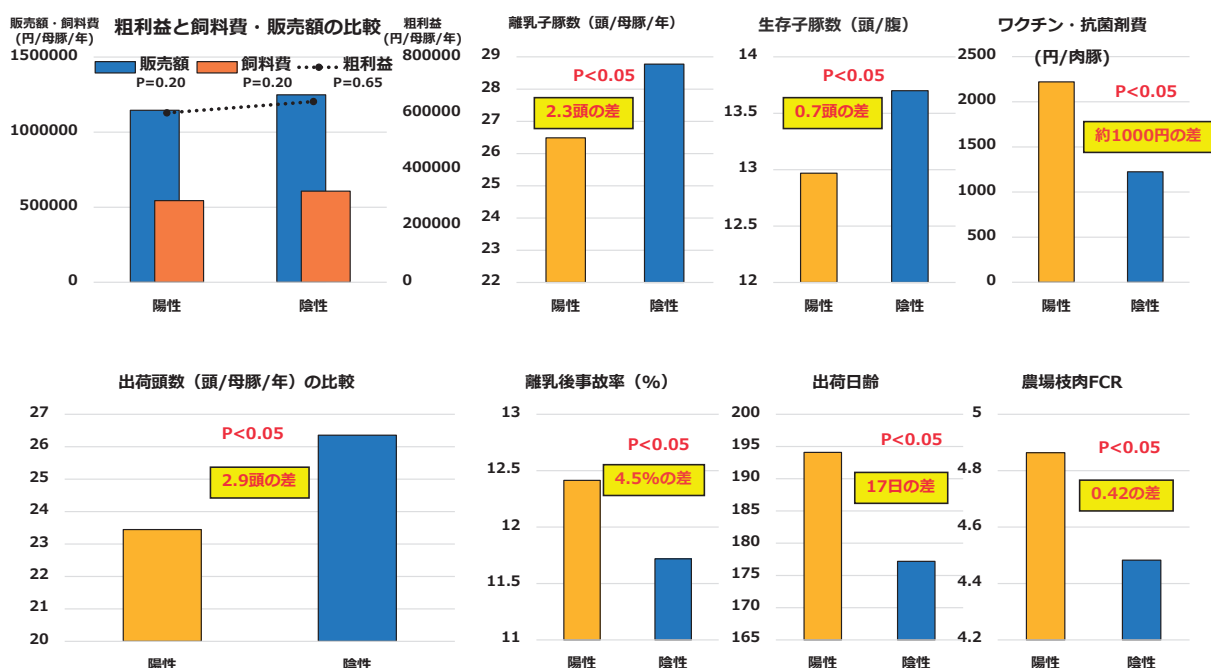


図7 PRRS陽性（N=104農場）とPRRS陰性（N=55農場）別の成績比較

粗利益に統計的な有意な差はみられませんでした。この点に関して、同一の飼養規模グループ内において、数値のバラツキが非常に大きかったことが要因の一つとして考えられます。図6には飼養規模別の繁殖・肥育成績の比較を示しました。年間母豚当たり離乳子豚数や出荷頭数は飼養規模グループ間における有意な差がみられませんでした。一方、飼養規模間の比較では枝肉価格に有意差が認められたほか、離乳後事故率に高まる傾向がみられました。大規模化に伴うピッグフローの複雑化や多サイト管理が、疾病のコントロール難易度を上げている可能性が示唆されます。

図7にはPRRS陽性(N=110農場)とPRRS陰性(N=58農場)別の成績比較を示しました。PRRSの罹患状況別の比較では、生産性の指標においてPRRS陰性の効果が如実に数値に反映されました。離乳後事故率は陽性農場より4.5%低く、年間母豚当たり出荷頭数が2.9頭、年間母豚当たり離乳子豚数が2.3頭多い結果となりました。さらに、農場枝肉FCRは0.42低く、出荷日齢も17日短縮されるなど陰性農場で極めて良

好であり、特にワクチン・抗菌剤費は肉豚当たり約1000円も低くなるという結果となりました。これは農場の衛生状況を良好にすることが、農場の生産性向上およびコスト削減に大きく貢献することを示唆しています。一方、年間母豚当たりの経済指標(販売額、飼料費、粗利益)に関しては、農場間のバラツキが大きかったためか、数値上では差がみられたものの、統計的に有意な差は認められませんでした。

成績上位/下位農場の成績比較

次に、成績上位・中位・下位農場の間における経済指標および繁殖/肥育成績の比較を図8、図9に示しました。農場の分類として、年間母豚当たり粗利益の項目を用いて、AIを用いた機械学習(階層的クラスター分析)によって成績を上位・中位・下位に分類しました。年間母豚当たり粗利益を用いて分類しているため、上位農場はもちろん年間母豚当たり粗利益が高く、そして年間母豚当たり販売額が有意に高かったものの、年間母豚当たり飼料費は上位農場と中位農場の間で差がみられませんでした。これ

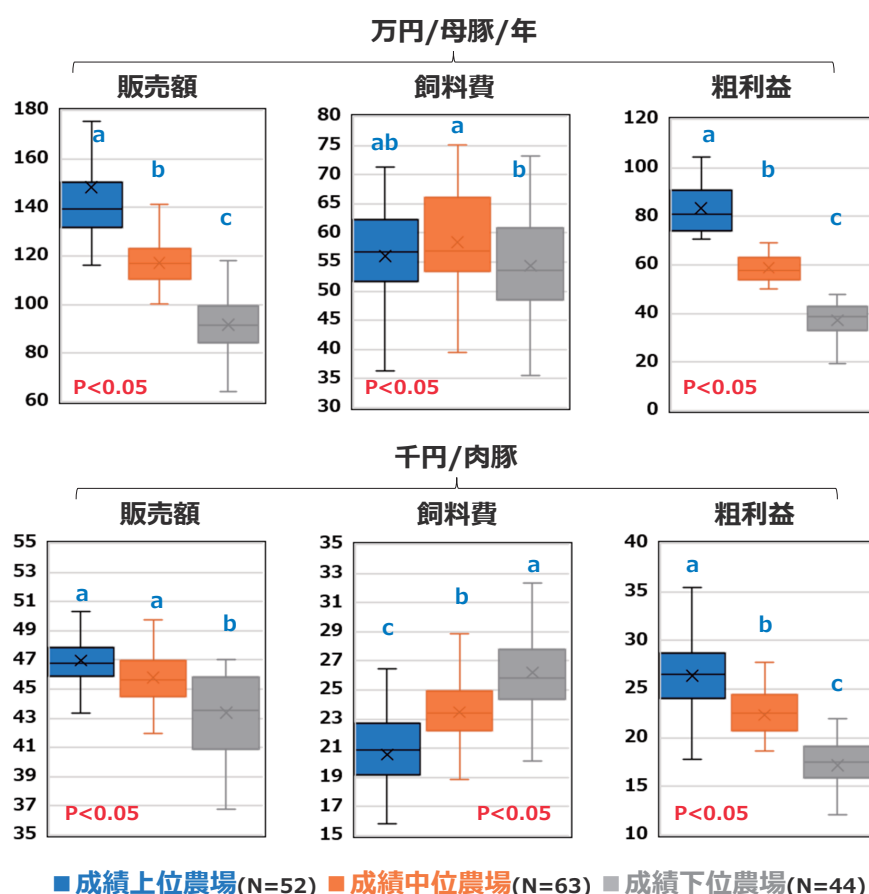


図8 成績上位・中位・下位別の経済指標の比較

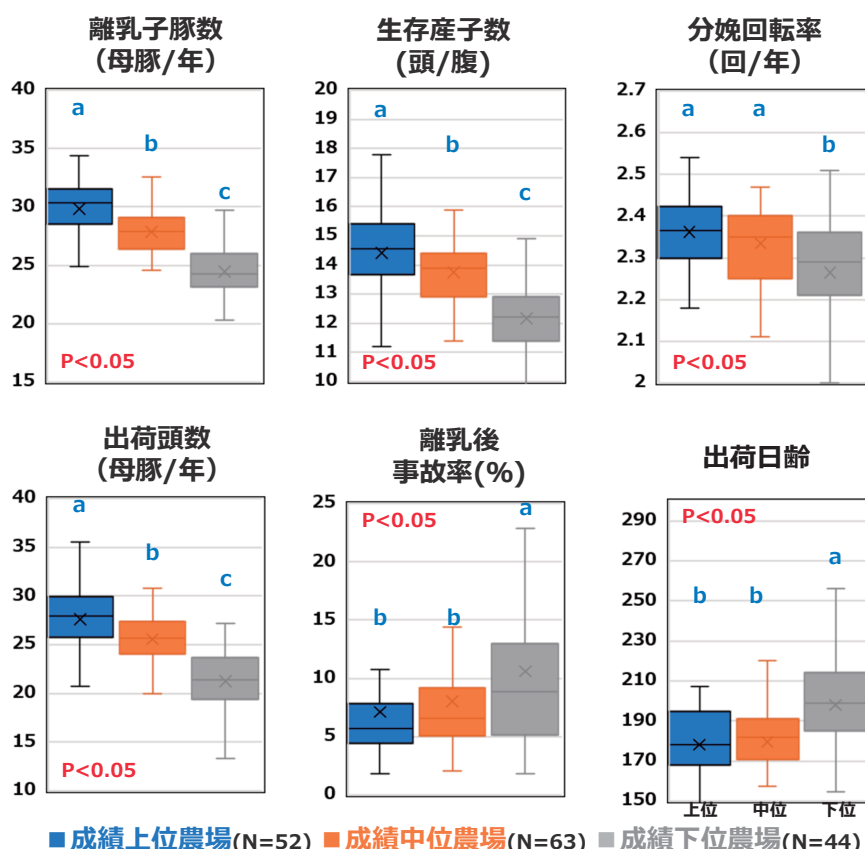


図9 成績上位・中位・下位別の繁殖/肥育成績の比較

は、成績上位農場の方が出荷頭数が多いため、母豚1頭が消費する総飼料費が同じでも、生産される肉豚頭数で希釈され粗利益の増大に寄与していることを示唆しています。また出荷肉豚1頭当たりの経済指標では、上位と中位で販売額に差がない一方で、飼料費には有意差（ $P < 0.05$ ）があり、上位と中位の差がコストコントロール（飼料費）に起因することが伺えます。下位農場においては販売額および飼料費に大きなバラツキがみられ、成績が下位である要因は販売額が著しく低いケースと飼料費が異常に高いケースの2つに分類できることが示唆されます。

繁殖/肥育成績では、成績上位・中位・下位農場で明確な差がみられている項目が一腹当たり生存産子数および離乳子豚数/腹です。上位と下位農場の間ではこの初期の産子数の差が、最終的な年間母豚当たり出荷頭数の決定的な差に繋がっていきます。単純に産子数の増加が粗利益の増加に必ず繋がるわけではありませんが、養豚経営では豚を出荷することで初めて収入が得られるため、母豚の産子数は重要視すべきポイントだと考えられます。近年多産系母豚

を導入する農場が増えてきていますが、自農場の成績に悩んでいる場合、今一度母豚の品種や交配管理について検討しても良いかもしれません。一方で、成績上位と中位農場の間では分娩回転率や分娩率に有意な差がみられませんでした。このことより、一定の管理水準（中位）に達している農場がさらに成績上位へとステップアップするためのポイントは、回転率の向上ではなく、純粋な産子数と飼料要求率であることが伺えます。

今後に向けた課題

JASVベンチマーキングでは月ごとの各種成績の数値を入力・提出いただいておりますが、入力精度のさらなる向上が望まれます。現状では、以下のような入力ミスが散見されます：出荷枝肉重量が生体重となっている、飼料購入量の単位がkgではなくt（トン）で入力されている、入力されている数値の桁が一つ足りない、あるいは重複して入力されている、など。これらの入力ミスを減らすためには、農場側のチェック体制強化（二重チェック）だけでなく、管理獣

医師による確認方法の見直しや、システム側での「前月数値の自動参照」など運用面の工夫も検討すべき課題です。

また、入力項目の拡充も重要な検討課題です。例えば、現行の入力項目では更新豚の導入頭数や母豚の廃用・死亡頭数が独立して入力されないため、正確な母豚の更新率、廃用率、死亡率が算出できません。これ以外にも、養豚経営の実態をより正確に把握するため、必要な項目の洗い出しと追加を検討していく必要があります。さらに、近年増加しているツーサイトやマルチサイト農場など複数サイト農場への対応も課題です。途中で子豚を一部外部に出荷した場合における成績の補正方法についても、今後検討を進めていく予定です。

最後に

ベンチマーキングによって自農場の立ち位置や業界全体の傾向を把握することは、農場経営における「健康診断」のようなものであり、最初のアプローチとして極めて重要です。しかし、システムから弾き出された数値はあくまで結果の表面に過ぎません。例えば、分析から「自農場は分娩率が低い」という弱点が見つかった場合、それが特定の産次や季節によるものなのか、精液の取り扱い体制に起因するのか、あるいは発情適期の見極め方に課題があるのかなど、真の要因を突き止めるには、ベンチマーキングの枠を超えた自農場の詳細な現場データの深掘りが不可欠となります。

そして、見つけ出した課題を実際の改善行動へと結びつけるプロセスにおいては、データだけでは決して測ることのできない「現場の人間関係」や「従業員の感情・モチベーション」といった要素が大きく影響を及ぼします。抽出された課題に対して現場にただ指示を下すのではなく、現場スタッフや経営者、管理獣医師といったステークホルダー全員で事実を共有し、協議を通じて具体的な解決策を決定していくプロセスが何よりも大切です。

最後に、ベンチマーキングは全体の傾向を把握することを主な目的としているため、参加農場数が少ない場合、得られる知見や情報は限られてしまいます。JASVベンチマーキングは、参加農場が増えるほ

どデータの精度と網羅性が高まり、我が国の養豚産業全体の生産性向上に直結する有益な知見を生み出します。業界の未来を共に切り拓くためにも、より多くの農場の皆様にご参加いただけることを強く願っております。本システムにご興味のある方は、ぜひJASV事務局までお気軽にお問い合わせください。

(一社) 日本養豚開業獣医師協会 (JASV) 事務局

TEL 029 - 875 - 9090

メール pig.jasv@r7.dion.ne.jp

賛助会員のご紹介

ラレマンドバイオテック株式会社

事業内容

飼料、飼料添加物、動物用医薬品に関する
開発と販売業務及びこれに関連した事業

所在地／〒105-0014 東京都港区芝二丁目3番3号 JRE 芝
二丁目大門ビル

電話／(03) 5418-8175

Email／kikaku-lbio-jp@lallemand.com

URL／<https://www.lallemandanimalnutrition.com/ja/japan/>



ラレマンド社は、19世紀の終わりにカナダで設立されたグローバル企業です。酵母や細菌などの微生物製品を通じて解決策を提供し、現在その事業は世界40か国以上で展開されています。

2015年から本格的にラレマンドアニマルニュートリションの一員として日本での活動を開始しました。

ラレマンド社の強みは、酵母や細菌に関わらず自社で保有する菌株の豊富さと数多くの研究や試験に裏付けされた豊富なデータです。

会社のスローガンに「Cooperation Spells Success」があります。これは、「協力が成功の鍵」という意味ですが、「業界のパートナーの皆様と積極的・継続的に問題解決を」というメッセージです。

日本の養豚業界は常に難しい環境下にあるとは存じますが、皆様との面談やセミナー他を通じて、私共が保有する情報や製品が少しでも皆様の解決に繋げることが出来るよう今後活動をしていくこととお約束いたします。

製品紹介「レブセルSB」

サッカロマイセス セルビシエ ブラディアイCNCMI-1079という活きた酵母です。活きた酵母が100億個/g含有されています。他の酵母株との大きな違いの一つは、酸に非常に強く活きたまま腸まで到達します。酵母が腸管内の酸素を消費することで健康な腸管を維持します。日本では馴染みの薄い活きた酵母ですが、諸外国ではヒト用のプロバイオティクスとしても広く知られています。

国内外の多くの試験結果等ご紹介可能ですので、是非、お問合せください。

今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。



Wel-farm Equipment合同会社

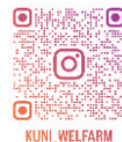
会社概要

代表者／代表社員 小林邦郷

所在地／〒195-0062 東京都町田市大蔵町
197-12

TEL／080-5194-1141

E-mail／kobayashi@welfarm-e.com



2023年に創業した、豚舎設備専門の会社です。日本・アメリカ・ヨーロッパの養豚場での勤務経験を活かし、設備や機材の選定・設計を行っています。最新のオランダ・デンマーク製品を中心に扱っております。応じた中国製品も扱っています。またアルミ製の豚輸送用トラック架台も扱っており、指定工場にて架装まで行っています。

生産現場での経験を活かした設備選定

ヨーロッパ製品は設計思想・使用上の品質が非常に優れているだけでなく、特に鉄製品は非常に高い耐久性を持っています。鉄自体の品質だけでなく高いレベルの溶融亜鉛メッキにより、非常に高い耐久性を持ちます。

アルミ製豚輸送用架台は、離乳豚用では1200頭の離乳子豚を、肥育豚用では100頭の肥育豚を一度に輸送することが可能です。これからの2サイト化や長距離の出荷時に、非常に役立つ製品です。

最近の多産子数化傾向や人手不足対策として、ミルク自動給餌システムの扱いを開始いたしました。オランダのDFS社の製品で、給餌槽ではなく専用の給水ニップルを使用したカップで給餌します。これにより給餌器の液面センサーを排除したシンプルな構造となっており、故障トラブルや設置時の煩雑さを回避しています。詳細はメールやDM等でお問合せください。



「矢原の部屋」 Vol. 17

専務理事 矢原 芳博

みなさんこんにちは、皆様のお悩み相談窓口「矢原の部屋」です。巻頭の理事長のご挨拶の通り、今年も7月24日に第26回通常総会を無事に開催することができました。組合員、賛助会員、ご協力いただいているすべての皆様に感謝申し上げます。

さて前回のゆめ通信146号は掲載記事のボリュームが多かったので、「矢原の部屋」をお休みさせていただきました。皆様とは4ヵ月ぶりとなりますが、その間に熊本では大きな地震が発生しており、被災された皆様には謹んでお見舞いを申し上げます。

今年も豚事協の催し物が始まります。

通常総会が終了した事を受け、今期の豚事協の各種セミナーが続々と開催されます。皮切りは、このお知らせが届いている事には終わっているのですが、8月20日、21日に第5回若夢会が東京八重洲で開催されました。大竹聡先生を呼びして、米国だけでなく、世界の最近の養豚事情をお話いただくと共に、参加された各農場のバイオセキュリティの問題点についてお互いにディスカッションする場となりました。更に9月の松山を皮切りに支部セミナーが全国6ヵ所で開催されます。本年も各支部ごとにテーマを決めて企画しておりますが、グループシステムのお話、火災予防のお話等々、今現在生産現場でのホットな話題を取り上げておりますので、皆様奮ってご参加ください。支部セミナーでは賛助会員様のブースも設けて、取り扱う商品説明も行いますので、こちらにも最新の機器の情報をゲットしてください。

さらに日本養豚開業獣医師協会（JASV）が毎年開催している口蹄疫終息記念セミナーを、今年も豚事協が共催することになりました。11月20日（金）にAP八重洲において開催しますので、こちらにも多くの皆様のご参加をお願いいたします。豚事協の各種セミナーのスケジュールは、このゆめ通信の最後のページに記載しておりますし、ホームページにも記載しておりますのでご覧ください。参加のご案内は順次お送りしていきます。

更に更に昨期からは、非常に最先端の話題、とてもマニアックな話題などを取り上げ、Webによるセミナーも適宜開催し始めました。すでに取り上げたテーマとしては、台湾発祥で中国に進出している「安佑」という人工乳メーカーの方に、中国における最新の人工乳の設計の考え方や話題のビル養豚について解説頂きました（2026/5/20開催、16名参加）。その他にも、ジンプロさんから有機ミネラルの蹄病への効果（2025/10/30開催、20名参加）、ラレマンドさんからレブセルという酵母製剤について（2025/9/5開催、18名参加）等々、参加者の多少にこだわらず、最先端の情報をタイムリーにお届けしていきます。Web開催であれば、農場での作業の合間に、気軽に繋いで視聴できるし、質問も可能ですので、皆さんお気軽にお申し込みください。そして、こんな話が聞きたいとか、あの話その後どうなってんの？とか、お聞きになりたい話題についてどんどんリクエストをお願いします。支部セミナーなどの大きな催しではなかなか取り上げられない話題でも、Webセミナーなら気軽に企画できますのでどしどしどうぞ。

豚熱の選択的殺処分が始まっています。

ゆめ通信145号このコーナーで取り上げました豚熱の選択的殺処分については、5月の国会で議決され、即時施行となりました。決して喜ばしい事ではありませんが、今年7月に静岡県富士宮市で発生した105例目から選択的殺処分が適用されました。この改正では、選択的殺処分のルールについてしっかりとした基準は示されているものの、実際にどの部分までを殺処分するか等については、発生農場の状況に応じて柔軟に判断する事になっています。105例目の場合は繁殖豚を残して、肥育豚はすべて淘汰したとお聞きしています。殺処分する範囲については、その農場のバイオセキュリティの状態も重要な判断材料になると思われ、日頃からの対策強化は重要です。

以上

JASVベンチマーキング2025

参加農場の2025年1月～12月間のベンチマーキング解析結果を元に、下記部門の上位三農場および各部門で成績が大きく改善された農場を部門ごとに「Jump Up賞」としてJASVが表彰し、豚事協から副賞として賞金を授与しました。全受賞者15農場のうち12農場が豚事協の組合員で、有限会社高尾農場が「母豚1頭当たり粗利益部門最優秀賞」を授与されました。

各部門の最優秀賞受賞者は下記の通りです。おめでとうございます。

- ・母豚1頭当たり粗利益部門：有限会社高尾農場（兵庫県・組合員）
- ・母豚1頭当たり出荷枝肉重量部門：有限会社飯田養豚場（青森県・組合員）
- ・母豚1頭当たり離乳頭数部門：有限会社飯田養豚場（青森県・組合員）
- ・農場枝肉FCR部門：有限会社飯田養豚場（青森県・組合員）
- ・離乳後事故率部門：みなみよ～とん(株)（岩手県・非組合員）

豚事協の第27期行事

理 事 会

第 1 3 3 回	令和 8 年 6 月11日 (木) (東京)
第 1 3 4 回	令和 8 年 7 月24日 (金) (東京)
第 1 3 5 回	令和 8 年 9 月10日 (木) (東京)
第 1 3 6 回	令和 8 年12月10日 (木) (東京)
第 1 3 7 回	令和 9 年 3 月11日 (木) (東京)

豚事協支部セミナー

中 四 国	令和 8 年 9 月25日 (愛媛県松山市・ホテルトップイン松山)
北海道東北	令和 8 年10月25日 (札幌市・ホテルマイステイズ札幌パーク)
中 部	令和 8 年11月27日 (愛知県名古屋市・TKP名古屋新幹線口)
関 東	令和 8 年12月11日 (東京都・AP東京八重洲)

※関東はJPPAと合同で火事対策セミナーを実施します

九 州	令和 9 年 1 月22日 (宮崎県宮崎市・アートホテル宮崎スカイタワー)
沖 縄	令和 9 年 2 月26日 (沖縄県那覇市・八汐荘)

また東北地区は今期北海道地区と合同開催を検討しております。

JASV口蹄疫終息記念セミナー 令和 8 年11月20日 (東京都・AP東京八重洲)

※JASVと豚事協の共同開催になります。

女 性 部

女性部セミナー 日程未定

そ の 他

海 外 視 察 研 修	令和 8 年 6 月2日～9日 (アメリカ)
海 外 視 察 研 修	日程未定 (オランダ)
第 5 回若者が夢を語る会	令和 8 年 8 月20日～21日 (東京)

※青字は令和 8 年 9 月 1 日以降の行事となります。

編 集 後 記

今年もアメリカ研修に行かせていただきました。とにかく物価が高い！というのが印象的でした。飛行機代、ホテル代などから始まり人を仲介するサービス業はとくに高く、スーパーマーケットでの購入はそれほど高く感じませんでしたが、レストランでの食事は非常に高価に感じました。それもそのはず、食品においては非課税が多いアメリカの州では（アメリカは州ごとで税制が異なる）、安価なスーパーマーケットでは水の値段1つとっても大きく異なります。空港など比較的高い場所で購入すれば4ドルほどかかりますが、スーパーでは1ドル台、大きく異なります。さらに、レストランで食事すると、ファストフード店を除けば基本的には働くスタッフのための制度であるチップ制度があるので、税金（だいたい12%課税）に加え15～20%がさらに加算されます。レストランでは単価も高く、物凄く違いを感じます。リアルに貧富の格差があると実感する日々でした。その中で豚肉の安さたるや衝撃でした。今回の記事にもある通りロース 100g 当り 69 円！あらゆるものが値上がりして問題になっている中、ビールよりも豚肉が安い。ちなみに、一番高かったのは球場でのビール代です。500 ml 缶一本 16ドル (160 円/ドルで 2560 円...) はしびれました。スーパーで買えば4ドルのビールが4 倍の値段に。しかし、球場の雰囲気は最高で値段のことなんてすべて忘れて盛り上がりました。アメリカの消費文化はこうやって刺激されていくのだ、としみじみ感じながら飲んだ今日この頃です。(加)